

『道成寺縁起』書名一覽書

大橋直義／中世日本文学・文献学(和歌山大学教育学部)

道成寺蔵『道成寺縁起』二巻二軸ほど、よく知られる書物でありながら、その名称に混乱のあるものは無い。

私見ではおよそ三つの階層に分節しうる課題がある。第一に、国指定重要文化財としての名称を「紙本著色道成寺縁起」二巻とするこの書物そのものについて、道成寺とその周辺においてどのように呼称してきたのかという観点である。本書には内題・尾題は見られず、(江戸前期)後補表紙に「道成寺縁起上(下)」と本文とは異なる手で墨書した外題が貼題簽にて示される。この表紙は、江戸時代中期に行なわれた開帳での口上に抛れば、徳川頼宣が寄進した蜀江錦の布表紙であるとされ、「後小松院宸筆」とする点、足利義昭が天正元年[1573]十二月に由良興国寺で披見したとする点とあわせ、見どころの一つとされている。本文とは別筆で記される義昭披見に関する識語にも書名は見られず、「此縁起」あるいは「日本無双之縁起」との賛辞が見られるのみである。幕末・明治の朝岡興禎『古画備考』および黒川春村・真頼『考古画譜』では本書を「道成寺縁起」と称する。同時代、『紀伊続風土記』が「絵縁起二巻」、その編纂に参画した小原良直の『典籍年表』が「紀伊国日高郡道成寺絵巻物 二軸」とすることに比べれば、『考古画譜』『古画備考』が実物の題簽・外題から得られる情報に即して記載していることがうかがえる。

ところが当の道成寺においても、江戸時代以後、その呼称に揺れがあった。院主真海が天和元年[1681]諸国巡見使を接遇した際の口上では、本書を単に「御縁起」と呼ぶのみ。一方、盛海代、宝永七年[1710]の接遇口上では「鐘巻由来之縁起」と呼称されるようになり、次の盛寛代でも同様であった。この「鐘巻由来之縁起」なる呼称は、享保四年[1719]に和歌山城下栗林明王院で行なわれた出開帳でも、出陳品一覧を示す際に用いられている。なお、開帳興行における口上では「勅筆之御縁起」と呼ばれていた(道成寺内に伝存する口上控としては宝暦十一年[1761]のものが最古。同年三月三日から二十日間の予定で寺内居開帳が行なわれた)。ただし先にも言及したように、これは足利義昭花押・識語、徳川頼宣寄進表紙と合わせて後小松院宸筆であるという「見どころ」に言い及ぶための呼称で、本書の書名とまでは言えない。さらに文政二年[1819]の名古屋阿弥陀寺の出開帳では「安珍清姫縁起 式巻」という呼称も見られるようになる。

第二の階層として、所謂「日高川草紙絵」と分類される酒井家旧蔵本・根津美術館本との対比や、『道成寺縁起』そのものの以外の伝本を含む全体をいかなる名称で呼ぶか、という



問題がある。前者について言えば、『古画備考』が「道成寺絵詞」として掲出する土佐廣周画の一本は奥書からして酒井家旧蔵本の転写本であろうし、その酒井家旧蔵本の加証識語には「右道成寺之絵一卷者…」と見え、道成寺という寺名すら登場しない本文を持つ同本までをも「道成寺之絵」としてしまうのである。

さらに第三の階層として、1968年に角川書店から刊行された『日本絵巻物全集』が『道成寺縁起』を指して「道成寺縁起絵巻」と誤記したことに起因する問題がある。1982年刊『続日本絵巻大成』が「道成寺縁起」と正確に示したにも関わらず、『全集』および五来重『絵巻物と民俗』(角川選書、1981)の影響力のためか、現在でも、本書を指して「絵巻」を含む七文字で記す例が後を絶たない。これまでに見てきたように、本書をこの七文字で呼ぶ事例は少なくとも前近代には見られず、固有名詞としては『道成寺縁起』と正確に記述することが重要である。

しかしそのことばかりでは現状の混乱は収まらない。『道成寺縁起』を含む書物群についての術語が必要だからだ。あくまでも一案だが、道成寺の鐘にまつわる安珍清姫の物語については「鐘巻由来」としてはどうだろうか。「日高川草紙絵」の対概念である。その他、道成寺という場に関わるものとしては創建縁起や在地系の「鐘巻由来」もある。また、歴史的に見れば「日高川草紙絵」も道成寺に関連付けられてきた経緯もある。つまり、『道成寺縁起』にわずかでも関わりうる書物については全てを「道成寺絵詞」と概括してみてもどうか。この術語が果たして浸透するかどうかは分からない。しかし、「道成寺縁起絵巻」という語は固有名詞としても集合名詞としても使わない姿勢こそが、より正確に「道成寺絵詞」(と芸能「道成寺物」)を把握するための一歩となることは間違いなくである。